

未体験者を初心者に、そして「仲間」に

～普及方向研修会報告～

松澤俊行

我々が愛するこのスポーツが存続するためには、今こそ普及について考え直さなければならない。

高まった問題意識

日本のオリエンテーリング界から、かつての活気がなくなり、停滞傾向にある。しかも、その傾向は、近年顕著である。それは、データにもはっきりと表れている。

<参考データ>

全日本大会出場数平成20年度(神奈川県)個人クラス出場者数 743人
平成16年度(静岡県)個人クラス 1,036人から 293人減少
都道府県協会登録者数全国合計
平成20年度 1,298人
平成15年度 1,544人から 246人減少
指導者登録数
(インストラクター1級2級、ディレクター合計)
平成20年度 652人
平成17年度 1,015人から 363人減少

我々が愛するこのスポーツが存続するためには、今こそ普及について考え直さなければならない。そうした問題意識から、JOA内に普及活動を考えるタスクフォース(TF)が設けられた。そのTFの、本年度の柱となっていた活動が「全国5地区での普及方法研修会」の開催であった。

研修の流れ

普及方法研修会は、下記の日程で開催された。

2009年12月5日(土) 開催地:岡山県
講師:松澤俊行 参加者:9人
2009年12月12日(土) 開催地:東京都
講師:高橋善徳 参加者:16人
2009年12月13日(日) 開催地:福島県
講師:高橋善徳 参加者:11人
2009年12月20日(土) 開催地:兵庫県
講師:松澤俊行 参加者:16人
2010年2月7日(日) 開催地:愛知県
講師:村越真 参加者:18人

研修は概ね6~7時間(休憩含む)の枠で実施された。内容は、「普及活動の現状についての参加者による評価と、数値データの確認」「未体験者を初心者にするための多様なプログラムの紹

介(*1)」「初心者を競技者にするための計画作り・仕組み作りについてのディスカッション」を中心とした。講師からのレクチャーやプレゼンテーションの他、シートの記入や演習、実技(運営実習)が含まれ、まさに「研修会然」とした雰囲気の中、普及について真剣な検討がなされる時間となった。

研修中に実践事例が紹介されたプログラム

- ・スクールO
- ・ロゲイニング
- ・キッズアドベンチャー
- ・クイックO
- ・読図講習会

「OマガジンやJOAニュースで、ほとんどの事例を知っていた」という参加者がいる一方で、どの項目についても「初めて詳しく知った」と、大いに刺激を受けたと見られる参加者もいた。

藤島氏とクイックO

研修内容は、基本的にTF内で話し合いを重ねて決定したが、各地の関係者へのヒアリングで聞かれた意見や要望なども取り入れ、細部を柔軟に変更していった。

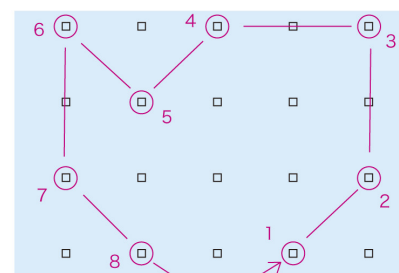
中でも、新潟県協会の藤島由宇氏の取り組みと、その背景にある考えは大いに参考になった。藤島氏は、「お客様から仲間へ」をキーワードに、新潟県内における「クイックO」(*2)の展開や、新クラブ(オリエンテーリン

グ少年団)の立ち上げ準備に奔走している。参加者として4会場の研修会に申し込み、全国の「普及仲間」たちとの情報交換を楽しみにしてくれていた。そうした藤島氏の経験と情熱が、TFメンバーも突き動かすこととなった。

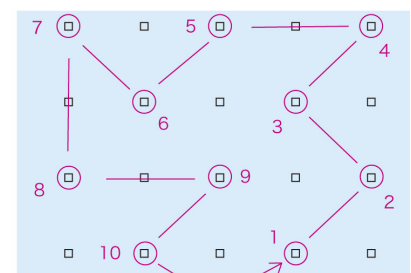
兵庫と愛知の研修会には、氏をアシスタント講師として招聘し、クイックOオリジナル版のデモンストレーションを受け持っていた。クイックOは、5地区全てにおいて研修前半のプログラム事例紹介の「目玉」的存在となった。



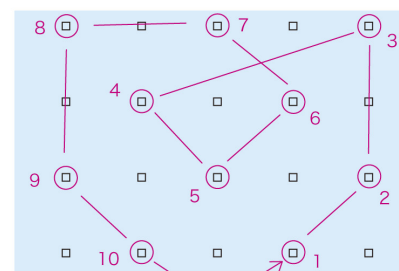
クイックOのコース図と、チャレンジする新潟県の子どもの写真
(コース図作成と写真撮影は藤島由宇氏)



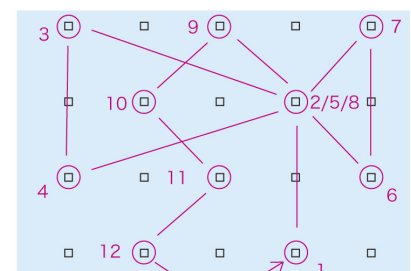
レベル1 フィニッシュ スタート



レベル2 フィニッシュ スタート



レベル3 フィニッシュ スタート



レベル4 フィニッシュ スタート

人工的でコンパクトな「テレイン」で、ユニット設置地点のみを特徴物として表記した地図（というより「図」）を用いて走る。正置し、順番通りに回り、パンチし、そして「判定」を受ける。「競技者の卵たち」は、短時間内に、段々レベルを上げながら挑戦を楽しみ、ポイントOのルールと正置を理解・習得できる。

地図作成、コース設定、現地作業にかかる手間も少なく、屋内での競技も可能である。<参考：藤島氏によるクイックOデモンストラーションの報告ページ>

<http://sanjo-olc.seesaa.net/article/129590284.html>

ディスカッション

研修後半のディスカッションの進行方法は、地区ごとに少しずつ異なった。下に、実際に取り上げた課題をいくつか記す。

課題1：

所属都道府県協会の競技者登録数を、200人増やすとしたら何をするか。資金や労力を考慮せず、まず「やってみよう」を挙げてみる。その後、実現可能性を考慮しつつ、挙げた方策の発想を現実の取り組みに具体的にどう活かすか、考える。

課題2：

研修参加者を初期メンバーとして、新しいオリエンテーリングクラブを立ち上げるとする。新メンバーは「オリエンテーリング未経験者」から補充する。1年後、クラブ員全員が「競技者登録」して、「全日本大会に参加」するにはどうクラブ運営を進めたら良いか。勧誘方法、活動内容、目標設定等を具体的に考え、年間計画を立てる。

「解答例」は省略する。そもそも、特定少数の「正解」はない課題である。研修に参加されていない方々も、それぞれについて少し考えを巡らせ、頭の中で実践手順をシミュレーションしてみたい。

関係者の反応

研修会について、「参加者が少ない。もっと多くの方と一緒にこの問題を考えたい」「宣伝が足りなかったのでは」との意見も聞かれた。次回以降の課題である。そうした中で申し込んだだけに、今回参加した全国の関係者70人は、普及活動に関するアンテナがよく利いた精鋭たちだったとも言える。終始当事者意識に満ちた積極性の高い姿勢が見られ、閉会前のスピーチやアンケートでは今後に向けての意欲的なコメントも目立った。

研修内容のさらに細かい内容の報告は別の場所に譲る（J O Aでは研修会の報告および教材その他資料をまとめたデータ集の編集と販売を計画中である）として、講師と参加者のコメントをいくつか紹介したい。

参加者のコメント

- ・やりたいこと、やらねばならないことを整理し記述するとその先に見えるものがある。
- ・今後、実際の活動に参画して理論を活かせるような研修があれば是非参加したい。
- ・様々なとらえ方を見聞きし、様々なアイデアに触れ、良いインスピレーションを得られたように思います。ただ、もう少し「広報」に関する話題が欲しかったように思います。
- ・OLへの固定観念が自分にあった。もう少し柔軟に取り組むことが必要だと感じた。討議することは自分を見詰めるのに役立った。
- ・幅広い様々な意見がある。今までの体験からなかなか脱却するのが難しい。
- ・既存オリエンティアがオリエンテーリングを楽しんでいないし、仲間を増やそうという気持ちを持っていない。まず、オリエンテーリングの魅力とは何かを考えてもらっても良いと思う。
- ・自分からのアクションが第一と分かった。実践している方の行動力の大きさと姿勢が伝わった。



運営実習（岡山）

講師のコメント（高橋善徳）

（東京会場、福島会場を担当）

新しい普及方法についての興味は非常に高く、意欲が感じられた。普及には2つのステップがあり、1つ目のステップを続けるだけでは仲間が増えないということを概念図（*3）で説明した。概ね納得していただけたようだった。

参加された受講者の方には行政関係者や学校関係者が多く、「行政や学校と連携をとり、普及につなげる」という意見が現実味を持ってとらえられた。また、大会を多く開くよりも、練習会

や講習会を行い、初心者を巻き込んでいこうという方向性が感じられた。

講師として準備不足だった面があったと自覚しており、不完全燃焼感も残った。正直、研修会の講師の任務は、今回ぐらいの目標レベル・期待レベルになると、他の仕事をもちながら行うのは（個人的な感想としても、そして恐らく一般論としても）厳しいと感じた。自分自身は、この春に埼玉県から福島県へ転居する。今後は、中央組織の活動よりも、地域の活動に主体的に関わる形で普及に貢献していこうと考えている。



講義の様子（福島）

講師のコメント（松澤俊行）

（岡山会場、兵庫会場を担当）

「現在の普及活動への満足度」については、概ね不満寄りの評価が参加者から聞かれた。兵庫会場では、「普及の到達イメージ」として、全日本出場人数と競技者登録人数の目標を尋ねた。全日本1000~2000人、競技者登録2000~3000人といった回答が主流で、現状や過去から大きく飛躍する構想を思い描いているケースは少なく、愛好者の数を過去の最盛期近くに戻しつつ内容を高める、といった現実路線を目指す関係者が大半だった。

競技者が少ない地域では、全国規模の将来像を構想するよりは、周囲を盛り上げるだけで手一杯、という雰囲気もあった。それは、ある意味当然であろう。

「今回知ったプログラムを早速取り入れたい」と、研修の内容を反応良く受け止める観想が多く挙がった。岡山会場と兵庫会場の参加者は、全体的に大会その他の運営経験が豊富であり、考え方を大きく転換するためではなく「既存のプログラムに工夫を加える」ために研修が役立ったようだ。

クラブ作りのシミュレーション演習は、オリエンテーリング界の組織全般が抱える弱点と共に、既存の活動の強みと応用可能性にも気付く時間となった。「大学クラブというのは良い活動をしている。考え方や実際のプログラムは地域クラブでも取り入れられる」という意見が、近年大学を卒業した若手参加者から聞かれ、頼もしく感じた。

講師のコメント(村越 真)

(愛知会場を担当)

意見交換、グループワークなども多様な意見を聞くことができ、参加者同士の刺激にもなった。いい形で研修が実施できた。他会場の研修の情報を参考に、かなり内容を絞ったので、全体的にはまずまずのゆとりで実施できたと感じた。

参加者は比較的熱心な関係者たちだが、それでも「過去1年間に一回でも人をオリエンテーリングに誘ったこと／そのような機会を作ったこと」は4割の人がなかった。また近年の普及の方法やバリエーションについては意外と知らない点は驚きであった。オリエンテーリングの将来を考える人が、少しずつでも普及に意識を向け、一人一人が「営業マン」として未経験者を勧誘し、またそのための方法を身につけるならば、オリエンテーリングにはまだまだ拡大の余地があると言えるだろう。

クラブ活性化のワークでは、知らず知らずのうちにオリエンテーリングの内向きの視点しか持っていないことに講師・参加者ともども気付くことができた。研修会として、正解を教わるだけでなく、正解に至るための視座を得たことが、研修会の最大の成果と言えるだろう。



ワークシート記入中(兵庫)

今後に向けて

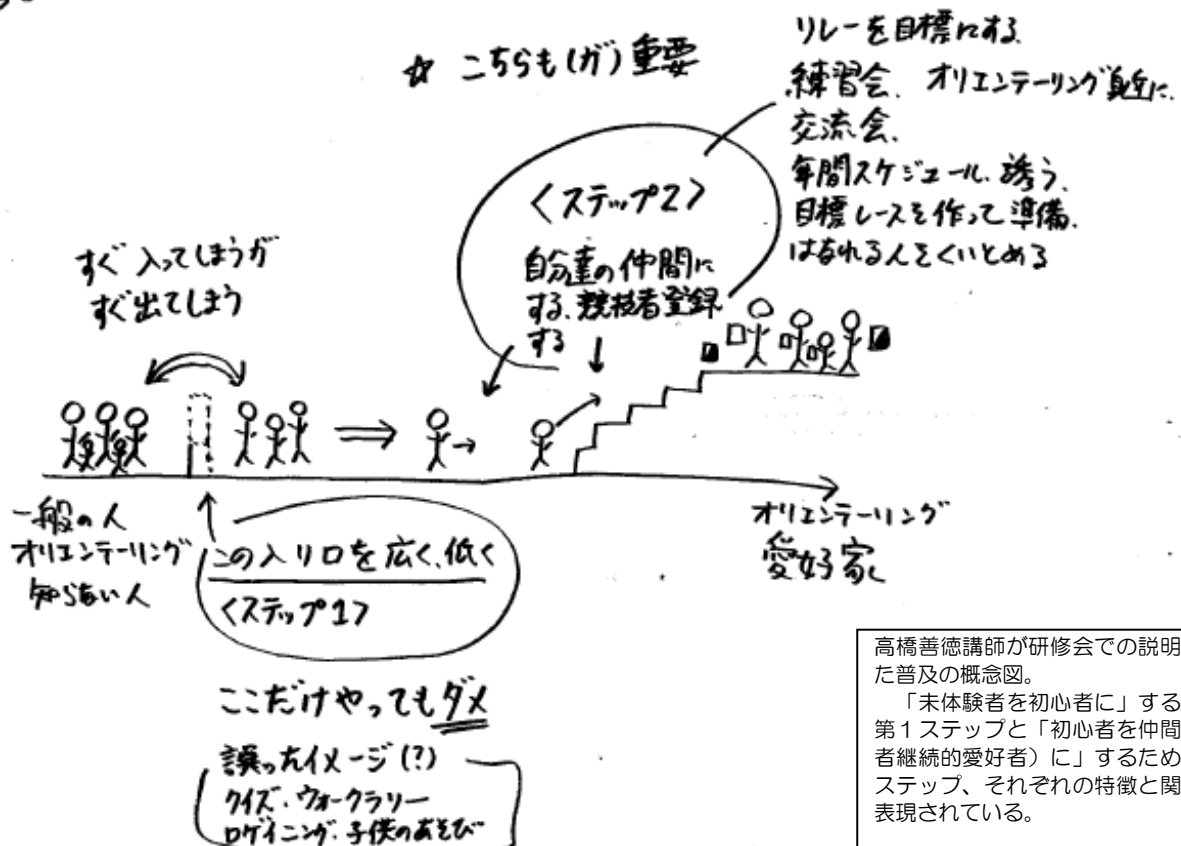
普及方法研修会は、各関係者からの高い評価を得て終了した。研修後に回収したアンケート中の、満足度を問う設問への回答を見ると、実に96%が5段階中上位2段階以内の満足レベルに達していた。研修会によって、参加者たちの普及に対する知識の増加、意識の向上は確実になされたと見て良いだろう。大切なのは、その知識や意識を、地域での日常的な実践に結び付けることである。そして、実際に各地で活発な普及活動が展開され、オリエンテーリング界に「仲間」が増えることである。

「分析や考察、提言が学会発表のように整っていて説得力がある。そして、学会発表のように世間から離れた空間

で完結している」とは、オリエンテーリング界のセミナーに対してしばしば聞かれる評価である。普及活動TFメンバーには、より一層現場の目線や視点に配慮した企画の立案と展開が求められるよう。また、J O A 上層部にも、各地でのすぐれた実践が他の地域に波及し、オリエンテーリング界全体の活力につながるような組織作り・仕組み作りに向けての、強力なビジョンの提示やリーダーシップの発揮が期待される。

(松澤俊行)

普及の概念図



高橋善徳講師が研修会での説明に用いた普及の概念図。

「未経験者を初心者にするための第1ステップと「初心者を仲間(競技者継続的愛好者)にするための第2ステップ、それぞれの特徴と関連性が表現されている。